

伊勢神宮崇敬会だより

みもすそ

特集
神楽祭

お伊勢さんの歳時記

10月 1日 神御衣奉織始祭

1日 御酒殿祭

5日 御塩殿祭

13日 神御衣奉織鎮謝祭

14日 神御衣祭

15日 神嘗祭

11月 5日 倭姫宮秋の例大祭

23日 新嘗祭

23日 大祓

12月 1日 御酒殿祭

15日 月次祭

23日 大長祭

28日 大麻奉製終了祭

31日 大祓

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすそがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書、表紙は、昨年の春の神楽祭で披露された「左方抜頭」。

青空の下、内宮神苑に優雅な楽の音が流れ、あてやかな装束の舞人が特設舞台で舞う。神恩に感謝し、国民の平和を祈って春と秋に神宮舞楽を公開する神楽祭です。

春の神楽祭は「昭和の日」、秋の神楽祭は「秋分の日」をはさんだ三日間行われます。

ふだんは神楽殿の中でしか見られない舞楽が四曲も披露されるとあって、多くの参拝者が幾重にも舞台を取り巻きます。

今号では、今春の神楽祭を振り返りながら、春秋の特別な三日間をご紹介します。

雅楽の専門家集団

神宮神楽祭は、戦後まもない昭和二十一年、恒久の平和を祈るとともに雅楽を広く知っていただくために始められました。

雅楽とは、飛鳥・奈良時代から平安初期にかけて中国大陸や朝鮮半島から伝来した音楽と、日本古来の儀式音楽や舞踊の総称。その伝来や舞の有無によって、管絃・舞楽・催馬楽・朗詠・国風歌舞などに大別されます。舞が伴うものを舞楽といい、中国・インド由来のものを左方舞、満州・朝鮮由来のものを右方舞と呼んでいます。

中国や朝鮮では王朝の交代などに伴い早くに途絶えましたが、日本では宮中の儀式や社寺の祭祀に演奏され、今日まで連続と伝承されてきました。神宮でも古来、祭典に多くの歌舞が奏されていたことが記録に残されています。

神宮に雅楽の専門職が置かれるようになったのは明治の初め。宮内省式部寮から授けられた流れをくむ、国内では数少ない雅楽のプロ集団です。

楽長・副楽長・楽師・舞女など約七十名が奉養部雅楽課に所属。ふだんは外宮と内宮の神楽殿に交代で勤務し、ご参拝に来られた方が御神楽をあげる際に楽と舞を奉奏しています。

全四曲を特設舞台で

日頃は屋内で神前に舞楽を捧げている雅楽課の方々が、多くの人前でその腕前を披露する機会が、春と秋の神楽祭です。

祭りの初日には、まず外宮、内宮それぞれの神楽殿においてご祈祷が行われます。公開舞楽は三日間、内宮神苑でのみ午前十一時と午後二時からの二回です（※雨天時は参集殿奉納舞台にて午前十二時のみ）。

披露されるのは全四曲。最初に演奏されるのは、舞台を祓い清めるとされる「振鉦」です。古代中国の故事に由来し、左方と右方の舞人が鉦を振り天地を鎮め安んじて、天下泰平を言祝ぐのです。

龍笛と太鼓・鉦鼓による短い曲が前奏された後、赤い袍に金色の鉦、緑の袍に銀色の鉦を持つ二人が登場し、太鼓の拍子にあわせて鉦を振りながら舞います。

二曲目は、神宮に伝わる舞楽曲の中から時節に合った曲が選ばれます。今春、公開されたのは十三年ぶりとなる舞楽「北庭楽」。亭子院の御代（八八七〜八九七年）に平安京の宮城内、不老門の北庭で作ったと伝わる曲で、赤い衣装に鳥甲をかぶった四人の舞

特集 神楽祭

春と秋、神宮では神恩に感謝を捧げ国民の平和を祈る「神楽祭」が行われます。内宮神苑の特設舞台で雅やかな舞楽が公開され参集殿の奉納舞台では全国からの方々による伝統芸能の披露など神賑わいの行事が奉納されます。



- 1/春の神楽祭の象徴的な演目「胡蝶」。舞女たちが花を追いかける蝶のように可憐に舞う。
- 2/鳥甲を披り、襲装束(かさねしやうぞく)を着け、神楽殿から内宮神苑の特設舞台へ向う演者。
- 3/緑と赤の袍を着た舞人が鉦を振る「振鉦」。
- 4/眉をつり上げた赤い面と毛縁(けり)の装束を付け、右手に桴(ばち)を持って舞う「左方抜頭」(さほうとう)。昨年春の神楽祭の演目。
- 5/「北庭楽」を鑑賞する大勢の参拝者。





右／秋の神楽祭で恒例の演目「迎陵頻」。
左／舞台の背後で演奏する楽師。



人が、笙や太鼓の音色に合わせて荘重かつ華麗な舞を披露。

三曲目は、春は「胡蝶」、秋は「迎陵頻」が定番です。胡蝶は童子の舞として名高い曲で、萌黄色の袍をつけ、背には美しい蝶の羽、手には山吹の小枝を持った舞女四人が、花園でひらひらと遊び戯れるちょうちょうのような舞を見せてくれます。

迎陵頻も同じく童舞です。極楽に住んでいるという鳥、迎陵頻伽が美しい声で鳴き、舞うさまを表現したものといわれ、日本には奈良時代に伝えられたとか。赤色の装束をまとった舞女四人のすがたは、紅葉を待つ季節にぴったりです。

締めくくりは、楽師のみによる舞を伴わない特殊曲「長慶子」。平安時代中期、雅楽の名手として知られた源博雅の作曲と伝えられ、退出を促すために奏されます。これで公開舞楽は終了です。

献茶席や神宮茶室の公開も

神話の「天の岩戸」のように、古より人々は米や酒を神前に供え、楽しい歌や踊りを奉納してきました。そうした神賑行事の伝統は、神楽祭にも息づいています。

神楽祭の楽しみは公開舞楽だけではありません。期間中、内宮参集殿の奉納舞台では全国各地の伝統芸能が大御神に奉納されるほか、名流名家の奉納行事も目白押しです。

宇治の老舗茶舗「丸久小山園」さんは、神楽祭が始まった当初から毎回、参集殿の苑地に野点茶席を設け、伊勢茶道協会の協力



神楽祭に合わせて庭上公開される神宮茶室。せせらぎや池を配し、苔や広葉樹に彩られる日本庭園が美しい。



参拝者をもてなし、日本文化を伝えるため、「丸久小山園」による献茶が続けられている。多い日には2000人以上のお抹茶を点てることも。

を得て無料でお抹茶をふるまっています。ふだんは立ち入れない神宮茶室の庭上公開も楽しみです。昭和六十年、故松下幸之助氏（元伊勢神宮崇敬会会長）より寄贈された見事な茶室と庭園は、日本建築の美を感じさせてくれます。

いつもの荘厳な雰囲気とは趣を変える雅やかな春秋の神楽祭に合わせて、ぜひ神宮をご参拝ください。

神楽祭での献茶を続けて七十余年 宇治「丸久小山園」訪問記



1



2



3

- 1／北窓から自然光が注ぐ黒色の検査室で、茶の色、香り、味、湯通し色を確認、等級を定める小山元治園主。奥はご子息の真石氏。
- 2／室温20度、湿度40％に保たれたひき茶室で、石臼が左回りに毎分55回転し、じつくりと碾茶を5〜10ミクロンの粉末抹茶にひく。
- 3／宇治市小倉町にある本社工場。



神楽祭に奉仕する小山園主(右)と弟で専務の小山俊美さん。

京都府宇治市の茶舗「丸久小山園」さんは、戦後間もなくから春秋の神楽祭に献茶をされています。こういった経緯で献茶を始めたのか、その歴史や茶づくりとは。現地へおじゃましてうかがいました。

「当園は元禄年間、小山久次郎が茶の栽培と製造を手がけたのが始まり。四代後に販売もするようになり、明治期に全国へ販路を広げました。神宮での献茶は、後に大宮司となられた慶光院俊氏と親交のあった先々代の祖父・元次郎が、氏からの提案で、日本文化を知っていただく機会になればとお受けして以来三代、七十年以上にわたりご奉仕させていただいております。中日にはお神楽を上げるのが恒例で、献茶のおかげで当園が守られていると思っております」

十一代目園主の小山元治さんは、茶審査技術日本一になった目利き。新茶



工場見学を受け入れる横島工場には茶室も設置。



昭和23年に神宮から贈られた委嘱状と木札。先代の正美氏は神宮評議員を務めていた。

が出回る四月下旬から八月いっぱい、色や味、香りで茶の等級や価格を決める忙しい日々が続きます。現在は農家からの仕入れが主流ですが、その年の味の基準とするため自園でも茶を育て、品評会にも出品されています。

色鮮やかで香り豊かな宇治抹茶は、よしずや藁などで日射しを遮った覆下園で育ちます。わずかな日光により、柔らかく葉緑素が増した新芽を手摘みしたら、すぐに蒸して発酵を止めます。送風と乾燥炉で水分を抜いた荒碾茶は冷蔵保存され、必要に応じて精撰加工され、石臼でひいて抹茶となります。「日本へ茶を伝えた栄西禪師は、茶は養生の仙薬と言われました。今やお茶はペットボトルという方も増えていますが、ビタミン不足になりがちな高山へ、抹茶を持って行かれるアルピニストもいらっしゃるんですよ」

園主の弟で専務の俊美さんは、抹茶の良さを若い世代にも知ってもらおうべく、冷水で点てられる抹茶を考案するなどその可能性を追求されています。